

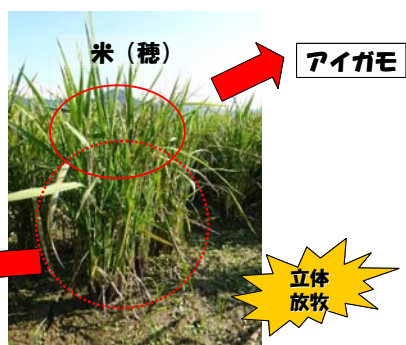
アイガモ・但馬牛の時間差立体放牧で飼料費を削減

美方郡は、水稻栽培と和牛繁殖経営が基幹農業である。近年、耕作放棄地解消対策の一手段として、但馬牛放牧の実施やアイガモを利用した水稻栽培が行われている。

2009年度専門技術員調査研究の成果を基に、飼料イネの穂をアイガモに食べさせた後、但馬牛を放牧して残った茎葉部分を食べさせる現地実証を行い、放牧牛の食べ残し等のロスは機械収穫の約半分、牧養力^{*}は野草地と比較し2.6と高く、飼料費の削減に繋がった。

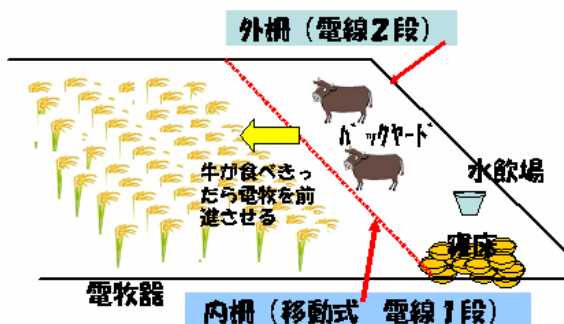
取り組み

飼料イネ（品種：べこごのみ）の栽培面積は20畝、6月9日に田植えを行った。他ほ場の除草作業が終わったアイガモを出穂始めの飼料イネ栽培ほ場に入れ、穂を採食させた（出穂期7月末）。アイガモはピーク時には400羽余りを入れたが、穂がほぼ食べ尽くされた9月3日に引き上げた。その後落水し、1カ月かけて放牧に耐えるよう土壌を固めた。



モーダック放牧のイメージ

但馬牛の放牧を始める準備として、長方形のほ場の短辺に平行5畝の幅でイネを刈り払い、バックヤード(図)とした。ほ場の隅に牛が休む場所として刍殻を敷いた寝床をつくった。水槽は漬物桶^{おけ}を用い、水は用水路からポンプを使い適宜継ぎ足した。



ほ場を囲う牧柵^{きく}は、アイガモ用に設置した電柵を

そのまま使用した。放牧牛に効率的に採食させるため、ほ場の短辺に平行でかつ立毛イネの手前70cm程度の高さに電線一本を張り、採食範囲を制限した。電線は毎朝8時頃、採食株の前まで移動した。

放牧牛は放牧経験牛であり、入牧後1~2日間は主にバックヤードの刈り払ったイネを採食したが、その後は柵越しに立毛イネを採食した。

実証の結果

牧養力は野草地と比較して約2.6倍（通常の草地は約30CD^{*}/10畝）であった。（表）

表 放牧頭数と牧養力

面積	頭数	期間	延べ頭数	牧養力
8.69a	2頭	34日	68頭	78CD/10a

また、収穫ロスは小型ロールベアラー等の機械収穫では20畝程度発生するが、放牧牛が株元から食べることで、その量は約10畝と半分であった。さらに、米(粳)の部分はアイガモ、茎葉は但馬牛が無駄なく利用することで飼料費を削減できた。

普及上の注意事項

脱柵を未然に防止するため、放牧牛には、必ず電気牧柵に慣れた放牧経験の豊かな牛を選定する。また、ほ場の泥濘化^{ぬかるみ}を防止するため適正放牧頭数を守り、補助飼料を与える場合は餌箱と水飲み場を離す。

守谷 吉弘（新温泉農業改良普及センター）

（問い合わせ先 電話：0796-82-1161）

^{*}放牧地としての生産力を示し、CD(カウデイ:草地で牛が何頭×何日飼養できるかを表す単位)で表す。